

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：35305

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01097

研究課題名（和文）中央アナトリアにおける銅石器～前期青銅器時代の文化動態

研究課題名（英文）Cultural Dynamics from Chalcolithic to Early Bronze Age at Central Anatolia.

研究代表者

紺谷 亮一（Kontani, Ryoichi）

ノートルダム清心女子大学・文学部・教授

研究者番号：50441473

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、トルコ共和国中央部に位置するキュルテペ遺跡の発掘調査を行い、そこから出土した遺構や遺物の分析から、後期銅石器～前期青銅器時代の文化動態と都市化に関する検討を行った。その結果、キュルテペにおいて本地域待望の後期銅石器時代の遺構や文化層を検出することができた。これにより、後期銅石器時代～前期青銅器時代の連続的な物質文化の様相を明らかにできるようになった。特に、これまで不明瞭であった当該時期の編年に関する知見を得ることができた。また、後期銅石器時代の大規模建築址の検出により、都市形成期の集落像を描くことができるようになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中央アナトリア地域は、新石器時代～鉄器時代にかけて西アジア史の理解に多大な後見を果たした遺跡が少なくない。しかしながら、銅石器～前期青銅器時代にかけての考古学的な資料が明らかでなかった。つまりは物質文化の編年や並行関係が不明瞭であるがゆえに、この時期に起こる都市形成という歴史事象の検討も詳細に行うことができなかった。後期銅石器～前期青銅器時代の資料を得ることができたという本研究の成果は、本地域における新たな基準資料を提示することとなり、メソポタミアや南東ヨーロッパまでを視野に入れた詳細な文化動態と都市形成の議論を可能にする点に大きな意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：This research has focused on the cultural dynamics and the urbanization from the Chalcolithic to the Early Bronze Age in Central Anatolia, primarily through the excavation and analysis of the archaeological evidence from Kultepe in central Turkey. A new late Chalcolithic cultural layer and a large zigzag building at the central trench in Kultepe were discovered. This allows for a clearer understanding of the material culture in the Late Chalcolithic-Early Bronze Age sequence which was previously unclear in this area. In particular, the discovery of a large zigzag building at the Late Chalcolithic Age is important for considering the origin of urbanization.

研究分野：西アジア考古学

キーワード：アナトリア 銅石器時代 前期青銅器時代 文化動態 大規模建築址 埋納土器

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

中央アナトリア地域(現在のトルコ中央部)は、発達した新石器社会の存在を示したチャタル・ホユック(Mellart1967, Hodder1996他)、大量の粘土板文書の出土によって西アジア交易史を刷新した中期青銅器時代のキュルテペ(Özgülç1950他)、ヒッタイト帝国の首都の状況を明らかにした後期青銅器～鉄器時代のボアズキョイ(Bittel1970他)などによって、先史～古代における西アジア史の理解に多大な貢献を果たしてきた。一方で、新石器時代と中期青銅器時代をつなぐ、銅石器～前期青銅器時代の考古学的状況が明確になっておらず、中央アナトリアの地域史はもちろん、中期青銅器時代以降における文化的隆盛の背景も不明確なままとなっており、西アジア史にとっても大きな問題となっている。また当該時期は、メソポタミア地域を中心に都市が人類史上初めて興った時期でもある。これはつまり、西アジア周縁部における都市形成過程の様相も明らかになっていないことをも示しており、上記問題は人類史的な課題をも内包したものとなっている。

中央アナトリアに、これまで銅石器～前期青銅器時代の遺跡発掘調査がなかったわけではない。アリシャル・ホユック(von der Osten1932)やアラジャ・ホユック(Koşay1966)などがあり、前者の遺跡は現在もなお中央アナトリアにおける文化および物質文化編年の基軸となっている。しかしながら、それ以後のまとまった調査例は乏しく、アナトリア西部と東部における研究の進展(トロイやアルスランテペ)と比べて遅れをとっている現状がある。そしてそれ故に、汎アナトリア的文化動態や都市形成過程を把握することが困難になっている。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、中央アナトリアにおける銅石器～前期青銅器時代の物質文化を明らかにし、その編年および文化動態を明らかにすることにある。具体的には、(1)銅石器～前期青銅器時代の遺跡空間データベースの作成、(2)中央アナトリアに位置するキュルテペの発掘調査、(3)得られた資料の編年的研究および地域間交流の研究を行うことで文化動態を明らかにする。そして、これらを統合することで、中央アナトリアにおける都市の形成過程を提示する。さらに、東西アナトリアにおける既存研究や南北メソポタミアにおける都市形成論との比較を通じ、汎アナトリアひいては西アジア周縁部の都市形成過程について議論することを目指す。

### 3. 研究の方法

本研究では、上記目的を達成するために3つの課題を明らかにし、その統合を行う。本研究について、研究分担者はもうけないが、研究協力者としてフィクリ・クラックオウル(アンカラ大学教授)が参加し、現地渉外や共同発掘調査を実施する。

#### (1)銅石器～前期青銅器時代の遺跡データベースの作成

GIS(地理情報システム)と連動した遺跡空間データベースを作成する。銅石器～前期青銅器時代に該当する中央アナトリア地域(アンカラ県、コンヤ県、ニード県、チョルム県、ヨズガット県、スイヴァス県、カイセリ県など)の遺跡情報を収集する。データ化の項目は、位置情報、時期(編年的位置付けおよび14C年代データ)、遺構の構成・数、出土土器の構成・数、文献を基本とする。以上から、(2)キュルテペの発掘調査で得られた資料の比較材料を整備する。本作業は、中央アナトリアにおける文化動態を空間的に把握するための基礎作業である。

#### (2)中央アナトリアに位置するキュルテペの発掘調査

中央アナトリアに位置するキュルテペの発掘調査を実施する。キュルテペは、当該地域最大級の規模(570×480m)をもち、中期青銅器時代の基準遺跡となっている。近年、前期青銅器時代後葉のモニュメントと考えられる大規模建築址が検出された(Kulakoğlu et.al. 2013)。また、未だ地山までの厚い堆積層が確認されていることから、銅石器～前期青銅器時代前半の文化層が存在する可能性が極めて高い。本発掘調査の目的は、当該時期の編年確立や文化動態把握のための土器資料を得ること、および大規模建築址の変遷や集落構造を明らかにすることの2点である。発掘調査には、調査区を遺跡内に2か所設定して行う。

#### (3)得られた資料の編年的研究および文化動態の解明

当該時期の編年を整備するために、土器の型式学的・層位的検討と14C年代測定を行う。また、メソポタミア系・南東ヨーロッパ系・コーカサス系と考えられる遺物が出土していることがわかってきており、それらの共伴関係の整理を行うことで、地域間の年代的併行関係を構築し、搬入土器の流入状況等から地域間関係を考察する。(1)のデータベースも加味して、中央アナトリアにおける銅石器～前期青銅器時代の物質文化の様相および編年を明らかにすると同時に、当該時期における3地域の影響や文化動態の評価を行う。

#### (4)中央アナトリアにおける都市の形成過程

(1)~(3)によって、中央アナトリアにおける物質文化の様相、文化動態に加えて大規模建築址の変遷や集落構造が明らかになる。当該地域の都市形成過程について論じ、この成果を、東西アナトリアにおける既存研究や南北メソポタミアにおける都市形成論と比較することで、汎アナトリアについては西アジア周縁部の都市形成過程について議論する。

#### 4. 研究成果

##### (1)遺跡空間データベースの作成

これまで紙ベースで出版されたデータベースのデータ化を行った。当初予定では中央アナトリアのみが対象であったが、それ以外の地域についても必要と判断してデータ化を試み、銅石器~前期青銅器時代遺跡のデータ化を行った。

##### (2)キュルテペ遺跡の発掘調査

###### 北トレンチ

これまでの調査によって、本トレンチでは前期青銅器時代の文化層や建物などの遺構が確認されていた。一部未発掘であった部分について追加調査を行った。ピットからは、北シリア産と考えられる赤色彩文壺とインターメディアット土器が出土した。これにより、前期青銅器時代後半における北シリア方面との編年的並行関係に関する資料を得ることができた。また、前期青銅器時代初頭と考えられる建物跡を継続調査し、赤黒土器が出土したことを確認した。しかしながら、本トレンチは最深部で地表下約6mまで達しており、地下水による湧水によってこれ以上深く調査することが困難になった。そのため、他の地点に調査区を設け同時に調査を行った。

###### 西トレンチ

新たに遺跡西側に西トレンチ(約15m×15m)を設定した。この場所は、中期青銅器時代以降の堆積層が大きく削平を受けており、前期青銅器時代と考えられる遺構・遺物が分布していたため発掘調査を行った(図1)。

西トレンチでは、少なくとも2つの建築層が存在する。第1建築層に属する建築址では、幅160cmの壁を確認した。北側は切断された形になっているが、周壁もしくは城壁の一部の可能性がある。また、これに伴う敷石遺構も見られる。北側セクションには、幅2mを超える壁が見えており、方向性としては、この壁と繋がるものと考えられる。ただし、キュルテペの規模からして従来の城壁はさらに大きかった可能性もあり、今回発掘された構造物を確実に城壁と認定するには、発掘区



図1 西トレンチ

の拡張等、今後の精査が必要である。なお、本調査区ではダルボアズ土器(コンヤ・メタリックウエア)が出土しており、これに伴う炭化物を年代測定した結果、2475-2340 cal BC(±2)の値を得た。第2建築層では、大型建築址が検出された。プランから少なくとも3つの部屋が確認されている。また、これに伴う敷石遺構も存在する。前述した周壁下では厚さ約5cmの灰層を確認した。大型建築址は、この灰層下にあり、建築層を分ける際の鍵となりうる。灰層内の炭化物を年代測定した結果、2572-2513 cal BC(±2)の値を得た。

また、西端をさらに掘り下げたところ、溝状遺構が検出された。部分的に発掘した段階ではあるものの、幅は5m以上、深さ約2m以上になる可能性がある。本遺構の機能については、今のところ不明であるが、南北方向に伸びていることから、環濠のようにテペを囲んでいた可能性もある。また、断面には茶褐色の水性堆積層が見られることから、一定期間、溝に水が溜まっていたと考えられる。防御システムもしくは、運河のような性格であったのか、今後の課題となった。時期は、精査が必要ではあるが、第2建築層と同時期もしくはそれよりも古い可能性がある。

以上の西トレンチにおける発掘により、テペ全体にかなりの密度で前期青銅器時代の文化層が存在する可能性が高い見通しを得ることができた。

###### 中央トレンチ

2021年より、テペ中央部に新たに中央トレンチを設定した(図2)。このトレンチでは、東西方向に伸びるジグザグプランの大型建築址を検出した。当該建築址は、幅1.5mを超える日干しレンガから構成され、壁体は高い所では、床面から2mまで残存していた。また、これに伴うコリドールも発見することができた。出土土器には、中央アナトリアにおいて後期銅石器時代から前期青銅器時代I期に特徴的な遺物である赤黒土器や表面に白色刻文が施された黒色磨研土器等が認められた。また、所謂「フルーツスタンド」と呼ばれる、後期銅石器時代の指標とされる大型の高杯形土器も確認した。出土炭化物の年代測定を行った結果、BC3300頃であることが明らかになり、出土土器の特徴と年代測定値が矛盾なく合致した。

ROOM1と名づけた部屋からは、幅1.5mの壁に囲まれた当部屋内隅(南西隅、北東隅)には埋



図1 中央トレンチと埋納土器

納土器が設置されており、内部にはさらに小型土器があり、入れ子状態になっている。また、石製のドアソケットもみついている。また、径2mの炉や木柱跡らしきピットも確認されており、なんらかの儀礼が行われて可能性がある。部屋内からは特徴的な白色象嵌が施された黒色磨研土器片が出土している。これに類似した土器はブユック・ギュレジック等、黒海沿岸地域の北アナトリアとの繋がりを示すものである。この点においても、当該建築址が後期銅石器時代の所産であることを傍証しているものといえる。

さらに、当該建築下、地表下約6-7mまで部分的に調査した所、不定形な建築址を確認した。土器も上層とは異なり、赤色土器が大半を占める。放射性炭素年代測定の結果、BC3900年頃の値が出ており、キュルテペの起源は前4千年紀を遡る可能性もある。

### (3)まとめ

本研究課題における最大の成果は、後期銅石器時代の文化層と遺構をキュルテペにおいて確認できた点にある。資料が極めて少なかった中央アナトリアにおいて待望された当該期の良好な資料群といえ、これによって後期銅石器時代～前期青銅器時代の連続的な物質文化の様相を明らかにできるようになった。具体的な編年作業は現在進行中である。

また、今回明らかとなった後期銅石器時代の大規模建築址は、都市形成においてその指標の一つとされている神殿やモニュメントといったものに該当する可能性がある。機能や用途はもとより、その系譜や集落構造との関わりを明らかにすることで、都市形成時における文化的影響関係を推定することが可能となるだろう。出土遺物からは一部に南東アナトリアとの類似性が見て取れるが、これも今後の課題である。

前期青銅器時代には、南東アナトリアに加えてコーカサスや北アナトリアとの地域間交流も垣間見え、後半期には北シリアも組み込まれる。こうした文化動態が都市化を促進させ、キュルテペを大規模遺跡へと導いたのであろう。

一方で、従来後期銅石器時代においては、南東ヨーロッパの影響を受けたと考えられる彩文土器などが点的に確認されていたが、現時点では確認できていない。こうした点も含めて、大規模建築址成立時における地域間関係について多角的に探る必要がある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 5件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 須藤寛史・紺谷亮一	4. 巻 23
2. 論文標題 総論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西アジア考古学	6. 最初と最後の頁 85-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル	4. 巻 -
2. 論文標題 中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて キュルテベ遺跡中央トレンチ発掘調査 2023年	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 第31回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 26-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル	4. 巻 -
2. 論文標題 中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて キュルテベ遺跡中央トレンチ発掘調査 2022年	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 第30回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 紺谷亮一、F.クラックオウル、山口雄治	4. 巻 23
2. 論文標題 キュルテベ遺跡の都市性とその評価	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西アジア考古学	6. 最初と最後の頁 137-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 紺谷亮一・山口雄治・F. クラックオウル	4. 巻 -
2. 論文標題 中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて キュルテペ遺跡中央トレンチ発掘調査2021年 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第29回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 97-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 紺谷亮一・F. クラックオウル	4. 巻 23
2. 論文標題 キュルテペ遺跡の都市性とその評価	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西アジア考古学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Kulakoglu, F., Kontani, R., Uesugi, A., Yamaguchi, Y., Shimogama, K., Semmoto, M.	4. 巻 45
2. 論文標題 Preliminary report of excavations in the northern sector of Kultepe 2015-2017.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Subartu	6. 最初と最後の頁 9-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル	4. 巻 28
2. 論文標題 中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて - キュルテペ遺跡北トレンチ、西トレンチ発掘調査 (2020年) -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第28回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 59-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 紺谷亮一・山口雄治・F. クラックオウル
2. 発表標題 中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて キュルテペ遺跡中央トレンチ発掘調査 2023年
3. 学会等名 第31回 西アジア発掘調査報告会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 紺谷亮一・山口雄治・F. クラックオウル
2. 発表標題 中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて キュルテペ遺跡中央トレンチ発掘調査 2022年
3. 学会等名 第30回 西アジア発掘調査報告会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kontani.R, F.Kulakoglu, Y. Yamaguchi
2. 発表標題 Material Culture of Late Chalcolithic Age at Kultepe: Excavations at Central trench Kultepe 2021
3. 学会等名 5th Kultepe International Meeting (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 紺谷亮一・山口雄治・F. クラックオウル
2. 発表標題 中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて キュルテペ遺跡中央トレンチ発掘調査2021年 -
3. 学会等名 第29回西アジア発掘調査報告会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 紺谷亮一
2. 発表標題 中央アナトリアの都市化ーメガシティ、キュルテペの成立の背景を探る -
3. 学会等名 日本西アジア考古学会第25回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山口雄治・紺谷亮一・Kulakoglu, Fikri.
2. 発表標題 キュルテペ遺跡における前期青銅器時代の土偶と石偶
3. 学会等名 日本オリエント学会第62回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kulakoglu, Fikri. & Kontani, Ryoichi.
2. 発表標題 Kayseri İli ve İlçeleri Eski Ticaret Yolları ve Yerleşimlerinin Tespiti
3. 学会等名 Türkiye Yüzyıl Araştırmaları Webinarsi 2, Orta Anadolu-Karadeniz, VIII, Oturum (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル
2. 発表標題 中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて - キュルテペ遺跡北トレンチ、西トレンチ発掘調査 (2020年) -
3. 学会等名 第28回西アジア発掘調査報告会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
トルコ	アンカラ大学	カイセリ博物館	